

伊藤義教博士の略歴と著作目録

上岡弘二(編)

略 歴

- | | |
|----------------|-----------------------------------|
| 1909(明治42)年2月 | 山口県大津郡三隅町に生れる(2月23日) |
| 1926(大正15)年3月 | 福井県立福井中学校卒業 |
| 1930(昭和5)年3月 | 姫路高等学校(文科甲類)卒業 |
| 1935(昭和10)年3月 | 京都帝国大学文学部文学科(梵語学梵文学)卒業 |
| 4月 | 京都帝国大学大学院(梵語学梵文学)入学 |
| 1940(昭和15)年3月 | 京都帝国大学文学部副手 |
| 1941(昭和16)年3月 | 京都帝国大学文学部講師 |
| 1947(昭和22)年10月 | 京都大学文学部講師 |
| 1953(昭和28)年4月 | 文学博士(京都大学) 学位請求論文「マーヌシュチフル書翰集の解読」 |
| 1957(昭和32)年 | 西南アジア研究会顧問(1972年まで) |
| 1958(昭和33)年7月 | 西南アジア研究会幹事(1972年まで) |
| 1960(昭和35)年 | 西南アジア研究会編集委員(1972年まで) |
| 1963(昭和38)年4月 | 京都大学大学院文学研究科担当 |
| 1968(昭和43)年1月 | 京都大学文学部教授 梵語学梵文学講座担任 |
| 1972(昭和47)年3月 | 京都大学文学部停年退官 |
| 1974(昭和49)年5月 | 創立20周年記念日本オリエント学会賞受賞 |
| 〃 | 日本オリエント学会名誉会員 |
| 6月 | 京都大学名誉教授 |
| 1977(昭和52)年4月 | 京都産業大学外国語学部教授 |
| 1980(昭和55)年3月 | 京都産業大学外国語学部停年退職 |
| 1996(平成8)年10月 | 逝去(10月23日) |

著 作 目 録

以下の著作目録は、ご遺族より頂戴した、伊藤先生ご自身が手書された「義教の業績リスト(年代順に)」に基づき、そのご業績を、(1)単行本、(2)論文(①英文、②和文)、(3)書評論文、(4)翻訳、(5)小論・エッセイ、(6)その他、の5項目に分けて整理したものである。できるだけ、先生の書式を尊重しつつ整理し、また、パフラヴィー文字は先生の手書されたものをそのまま使用した。

なお、先生のお人柄などについては、井本英一「伊藤義教先生を偲んで」『オリエント』39-2(1996)pp. 143-44；同氏「伊藤義教先生を偲ぶ」『以文』40(平成9年)pp. 20-23；上岡弘二「伊藤義教先生のご逝去を悼む」『西南アジア研究』46(1997)pp. 70-71をご覧いただければ幸いです。

先生は、常に自説を再吟味し、補強してこられた。ここでは、刊行年次順に掲載するが、参照される時は逆順でご覧いただきたい。現在なお準備中の『ゾロアスター教論集』—これのみは目次を示すが刊行されたときには、索引付きでもあるので、先ず、それを参照していただくことになろう。

書誌データの確認にはご遺族の、全面的なご協力を得た。ここに記して感謝するとともに、改めて先生のご冥福をお祈りするしだいである。

(1) 単行本

『古代ペルシア—碑文と文学—』(1974)岩波書店[第2刷訂正版1979], xxii, 335, 30pp. 折り込み2枚

『ゾロアスター研究』(1979)岩波書店[第2刷訂正版1980], xxvi, 500pp.

『ペルシア文化渡来考—シルクロードから飛鳥へ—』(1980)岩波書店, xiv, 196pp.

Pahlavica V- VII, Misumi 1982, 71pp. (私家版)

(*Pahlavica V* : Old Persian *tačara* - and 'm't', and the Nihon Shoki [pp. 1-20]; *Pahlavica VI* : Western Middle Iranian Lexemes from Later 6th-century Japan [pp. 21-44]; *Pahlavica VII* : Onomastica Iranica from Mid-8th century Japan [pp. 45-68]. (with Plates [pp. 69-71]))

Pahlavica VIII : Nestorianism and the 景教 (kian-kau), Misumi 1983, 40pp. (私家版)

Pahlavica IX : On the name Zoroaster - An Eastern Access to Zoroāstra, Misumi 1984, 51pp.

(私家版)[以上の私家版は手書き、ゼロックスコピーによるものである。なお、Misumiは先生のご郷里、山口県大津郡三隅町のこと。]

『対訳正信念仏偈』(1994)京都中外日報社 78pp.

『ゾロアスター教論集』(組版中)平河出版社, 約550pp. (索引付き)

(1. 「アヴェスターの改削」をめぐる、2. 名詮自性「ゾロアスター」—東方からのアプローチ、3. 古期(古代)ペルシア語 *artā-ča brazmaniya* とその射程、4. アラム・イラン混成語形とその周辺—ゾロアスター在世代論へ、5. ヤスナ51: 16について—Av. *maga(van)*、

Ved. maghá (van)- および OP magu- に関説して-, 6. ジャムの十訓とヤスナ32:8, 7. カルデールの「ゾロアスターのカアバ」刻文について, 8. 萬葉集にみえるイラン人名について- 天武天皇挽歌二首をめぐる諸問題-, 9. 法隆寺伝来の香木銘をめぐる, 10. 『アオグマダエーチャー』-ゾロアスター教徒の一葬文-, 11. イランにおけるビジョン(靈観)の文学, 12. 『断疑論』, 13. 『好學の子』のテキスト復原とその背景, 14. 我観「景教」-呼称の背景をめぐる-て-, 附録 I. ゾロアスターとハオマ, 附録 II. ケーシュダーラン句の解釈について- 『デールカンド』第3巻から-, 附録 III. 再々論「吐火羅・舎衛」考, 附録 IV. パルミラと大秦国, 附録 V. ヤサー・アフー・ワルヨー告白文とアシュヴァイン双神について)

(2) 論文

①英文

Studia Medio-Iranica (I). 『言語研究』10/11 (1942), pp. 211-21.

Pahlavī 𐭯𐭥𐭥𐭫𐭪𐭥𐭩𐭫𐭲. *Irani Memorial Volume*, Bombay 1943, pp. 112-13.

Pahlavī 𐭯𐭥𐭥𐭫𐭪𐭥𐭩𐭫𐭲 in Eng. 『言語研究』14 (1949), pp. 22-39.

A Bundahišnīc Expression and What It Implies. *Orient* 1 (1960), pp. 35-43.

Gathica I : xšmāvātō, Gathica II : ākā, Gathica III : mānarōi, Gathica IV : ušəuru-, Gathica V : rašnā. *Orient* 3 (1967), pp. 1-20.

On the Iranism underlying the Aramaic Inscription of Aśoka. *Yādnāme-ye Jan Rybka*, Prague 1967, pp. 21-27.

Gathica VI : Henceforth Ardaštāna!, Gathica VII : arədra-. *Orient* 6 (1970), pp. 15-29.

Gathica VIII : Xerxes' Gatehouse "of All-Countries" at Persepolis. *Orient* 7 (1971), pp. 1-7.

Gathica IX : On the Sigmatic Future in Old Iranian, Gathica X : Old Persian ap^ad^an^a-. *Orient* 8 (1972), pp. 37-51.

Gathica XI: The Sixth Gāhānbār, *spənta*-, and *āmuš.haxš Ārmaitiūš*. *Acta Asiatica* 26 (1974), pp. 53-63.

Gathica XII : On the Meaning of 'Avestā'. *Orient* 10 (1974), pp. 1-9.

Gathica XIII : Av. *ax^harəta*- *x^harənah*-. *Orient* 11 (1975), pp. 35-44.

From the Dēnkard. *Acta Iranica* 4 (1975), pp. 423-33.

Gathica XIV-XV : Syenian *frataraka* and Persia *fratarak* / New Iranian Elements in Ancient Aramaic. *Orient* 12 (1976), pp. 47-66.

Old Medo-Persian *spāθa-maidā*-. *Orient* 13 (1977), pp. 15-19.

A New Interpretation of Aśokan Inscriptions, Taxila and Kandahar I. *Studia Iranica* 6-2 (1977), pp. 151-61.

Aśokan Inscriptions, Laghmān I and II. *Studia Iranica* 8-2 (1979), pp. 175-83.

Pahlavica I : Zoroastrians' Arrival in Japan. *Orient* 15 (1979), pp. 55-63.

- Pahlavica II : Jam's 10 Precepts and Yasna 32:8. *Orient* 16 (1980), pp. 173-81.
- Iranological Contributions of Ašokan Aramaic Inscriptions. *Acta Iranica* 22 : *Monumentum Georg Morgenstierne* I (1981), pp. 308-15.
- Pahlavica III : Some Remarks on Kardēr's Inscription of the Ka'be-ye Zardošt, Pahlavica IV : Aramaic Preposition *B* in Parthian. *Orient* 17 (1981), pp. 59-66.
- On Old Persian 'RT'Č' BRZMNIY. *Studia Iranica* 10-2 (1981), pp. 323-4.
- Pahlavica X : A Zoroastrian Proper Name from the *Man'yōshū*. *Orient* 22 (1986), pp. 1-15.
- On Yasna 51:16 — Referring to Av. *maga(van)*- and Ved. *maghā(van)*- (Gathica XVII) . *Orient* 23 (1987), pp. 1-21.
- On Yasna 32 : 16 (Gathica XVI). *Acta Iranica* 28 : *A Green Leaf. Papers in Honour of Professor Jes P. Asmussen* (1988), pp. 3-11.
- An Interpretation of Yasna 32 : 14 - with special reference to its l. c.- (Gathica XVIII) . *Orient* 25 (1989), pp. 43-50.
- On Pahlavī *hmdlǰ* (Pahlavica XI) . K. R. Cama Oriental Institute International Congress, Proceedings [5th to 8th JANUARY 1989], Bombay 1991, pp. 262-5.
- From the Dēnkard Book III-1. On 'some' *kēšdārān*-passages (Pahlavica XII) , 2. Pahlavī *dūr-xvardīhā* (Pahlavica XIII) . *Platinum Jubilee Volume*, K. R. Cama Oriental Institute, Bombay 1991, pp. 127-30.
- Pahlavi hapax legomena- 'wlyt', 'wl'yt'k and 'w'lyt'k (Pahlavica XIV) , *Orient* 27 (1991), pp. 36-43.
- Armenian *hratarak* and *tačar*. *Acta Kurdica - The International Journal of Kurdish and Iranian Studies* 1 (1994), pp. 113-20.
- Nāsatya*- : *Ašvīn*- and the *Yaθā Ahū Vairyō* Prayer (Gathica XIX) . *Orient* 30/31 (1994), pp. 98-107.

②和文

- 祇教における善悪行の記帳について 『西洋古典論集』(1949), 創元社, pp. 225-71.
- 祇教所伝ヤマ譚の一特色 『印度学仏教学研究』1-2 (1953), pp. 197-202.
- Yima の x^varənah 三翺について 『印度学仏教学研究』3-1 (1954), pp. 87-89.
- 広本『ブンダヒシユン』におけるカイ・カワート遺棄物語の詩形再構について 『言語研究』26/27 (1954), pp. 91-105.
- イマと太陽 『東方学論集』3 (1955), pp. 121-48.
- アルタクシェール行伝の宗教史的一背景 『五十周年記念論集』(1956), 京都大学文学部, pp. 17-38.
- 中世イランの将棋書(足利惇氏先生と共筆) 『西南アジア研究』2 (1958), pp. 1-18.

- 中世ペルシア語書ブンダヒシュンとその背景 『日本オリエント学会月報』3-1/2, pp. 1-16.
- イラン人の悲劇—文字と表記法の場合 『世界の歴史』2 (1960), 筑摩書房, pp. 191-224.
- ブンダヒシュン書の序・序章と etymologica Bundahišnica について 『西南アジア研究』6 (1961), pp. 5-28.
- Aβyātkār i Zarērān の宗教史的意義について 『西南アジア研究』10(1962), pp. 93-104.
- Aβyātkār i Zarērān の詩形再構について 『言語研究』44(1962), pp. 1-11.
- 中世イラン文学とその特色 『A・A地域総合研究連絡季報』9 (1963)
- 『先師金言要集』とアンダルズ文献研究序説(上) 『オリエント』7-1(1964), pp. 1-17.
- 『先師金言要集』とアンダルズ文献研究序説(下) 『オリエント』7-2(1964), pp. 15-31.
- 西安出土漢、婆合璧墓志婆文語言学的試釋 『考古学報』北京 1964—2期, pp.195-203.
- 西安出土漢蕃合璧誌婆蕃文解読記 『西南アジア研究』13(1964), pp. 17-34.
- アヴェスター州郡誌について 『インド学試論集』6/7(1965), pp. 5-17.
- 阿育王アラム語碑について 『オリエント』8-2, (1966), pp. 1-24.
- イラノ・アラマイカー『アルタクシェール行伝』の一節に関連して— 『言語研究』49(1966), pp. 1-10.
- サオシュヤントについて 『西南アジア研究』17(1966), pp. 55-61.
- ガーサー語彙の研究 『オリエント』9-1(1967), pp. 1-21, 英文要旨89-91.
- ゾロアストラ周辺論 『東洋史研究』26-1(1967), pp. 58-88, 要約 p. 3.
- 阿育王のカンダハール第二碑文について 『言語研究』55(1969), pp. 1-13.
- 自画自賛—古代ペルシアの場合— 『西南アジア研究』22(1969), pp. 79-88.
- ゾロアスター伝の一齣とその意義 『オリエント』11-1/2(1970), pp. 1-31.
- 第3サオシュヤントについて 『オリエント』12-3/4(1971), pp. 57-85.
- ベルセボリスのダリウス王宮(タチャラ)の性格について 『京都大学文学部研究紀要』13, pp. 1-23.
- ベルセボリスのダリウス王宮の性格について 『オリエント』13-3/4(1971), pp. 131-41.
- アパダーナを考える 『オリエント』16-1(1973), pp. 51-73.
- 『Avestā』の語義について 『オリエント』17-1(1974), pp. 39-58, レジユメ p. 144.
- 仏像光背の背景を示すイラン語詞について 『印度学仏教学研究』23-1(1974), pp. (35)-(42) =pp. 463-56.
- <シルクロード考(1)> 正倉院の屏風—シルクロードをたどりて— 『アジア文化』11-4(1975), pp. 64-79.
- <シルクロード考(2)> 孟蘭盆・修二会(一)—シルクロードをたどりて— 『アジア文化』12-1(1975), pp. 114-26.
- <シルクロード考(3)> 孟蘭盆・修二会(二)—シルクロードをたどりて— 『アジア文化』12-2(1975), pp. 108-26.

- 古代イラン民族における『罪』と『滅び』—ゾロアスターとダリウス大王の場合— 佐々木現順
編著『煩惱の研究』(1975), 清水弘文堂, pp. 2-40.
- Ayādgar ī Zarērān を補うもの 『三笠宮殿下還暦記念オリエント学論集』日本オリエント学会
編(1975), pp. 27-33.
- <シルクロード考(4)> 孟蘭盆・修二会(三)—シルクロードをたどりて— 『アジア文化』12-3
(1975), pp. 108-25.
- 阿育王のアラム語碑文新解読—タキシラ碑文と第一カンダハール碑文— 『佛教研究』7
(1978), pp. (51)-(70) = pp. 168-49.
- ザームヤズド=ヤシュトの課題 (Structure and Problems of Zām-yazd Yašt) 『足利惇氏博士
喜寿記念オリエント学・インド学論集』(1978), 図書刊行会, pp. 45-56.
- 『好学の子』のテキスト復原とその背景 (Zoroastrian Tractate on the Sacred Girdle 'Pus ī
dānišn-kāmag' - A new translation with textual criticisms) 『日本オリエント学会創立二十
五周年記念オリエント学論集』日本オリエント学会編(1979), pp. 35-49.
- 日本のイラン学—飛鳥寺造営記事にみえるイラン語彙のイラン学的価値について— 『京都産
業大学国際言語科学研究所所報』1-2(1980), pp. 41-52./『月刊言語』9-4, 通巻98号(1980),
pp. 99-107(再録).
- 『日本書紀』にかかれたトカラ人—『達阿・舍衛女・墮羅女考』舞台裏—<批判にも答えて>
『東アジアの古代文化』(大和書房)25, (1980年秋号), pp. 23-31.
- カルデルの『ゾロアスターのカアバ』刻文について 『オリエント』24-2(1982), pp. 1-18.
- 『日本書紀』とイラン—最近親婚の場合— 『東アジアの古代文化』31(1982年春号), pp. 132-40.
- 『アヴェスターの改削』をめぐりて 『日本オリエント学会創立三十周年記念オリエント学論
集』(1984), 刀水書房, pp. 55-68.
- 我観『景教』—呼称の由来をめぐりて— 『東アジアの古代文化』40(1984年夏号), pp. 138-51.
- アラム・イラン混成語形とその周辺—ゾロアスター在世年代論へ— 『三笠宮殿下古稀記念オ
リエント学論集』日本オリエント学会編(1985), 小学館, pp. 40-48.
- 名詮自性『ゾロアスター』—東方からのアプローチ— 『オリエント』29-1(1986), pp. 17-31.
- ゾロアスター教の渡来—天武天皇挽歌二首を解説して— 『東アジアの古代文化』51(1987年春
号), pp. 142-61.
- 法隆寺伝来の香木銘をめぐって 『東アジアの古代文化』54(1988年冬号), pp. 96-103.
- 『断疑論』の異教批判 『日本オリエント学会創立三十五周年記念オリエント学論集』日本オリ
エント学会編(1990), 刀水書房, pp. viii (レジュメ)/3-18.
- ルリスタン出土の一青銅剣銘をめぐって 『オリエント』39-1(1996), pp. 41-51.

(3) 書評論文

Jacques Duchesne - Guillemin, *The Western Response to Zoroaster*, Oxford 1958 『西南アジア研究』3 (1958), pp. 13-18.

Antonino Pagliaro : *Letteratura della Persia Preislamica*, Milano 1960への書評に寄せて 『西南アジア研究』5 (1960), pp. 18-33.

Helmut Humbach, *Die Gathas des Zarathustra*, Heidelberg 1959 『オリエント』5-3/4, (1962), pp. 63-85.

Le P. Pierre Jean de Menasce, *Une apologétique mazdéenne du IX^e siècle Škand-gumānīg Vičār - La solution décisive des doutes. Texte pāzande - pehlevi transcrit, traduit et commenté par ---*, Fribourg en Suisse 1945 『アジア・アフリカ文献調査報告』7 (西アジア2) (1964)

Walther Hintz, *Zarathustra*, Stuttgart 1961 『アジア・アフリカ文献調査報告』26 (西アジア9) (1964)

Olaf Hansen, *Mittelpersisches Lesebuch*, Berlin 1963 (足利惇氏先生と共筆) 『オリエント』7-2 (1964), pp. 77-91.

Emile Benveniste, *Titres et noms propres en Iranien ancien*, Paris 1966 『言語研究』55 (1969), pp. 73-77.

(4) 翻訳

ハム・セム諸語アントゥアヌ・メイエ / マルセル・コーアン監修 泉井久之助編 『世界の言語』(1954), 朝日新聞社, pp. 143-234.

アヴェスター 辻直四郎編 『ヴェーダ アヴェスター』(1967), 筑摩書房 『世界の古典文学全集』第3巻, pp. 323-95 [訳・注], pp. 417-30 [解説] (1976.2.15第2刷)

(5) 小論・エッセイ

チェコスロバキアのオリエント学—その伝統と近況— 『西南アジア研究』6 (1961), pp. 57-64.

アルトゥル・クリステンセンの人と業績 『西南アジア研究』7 (1961), pp. 61-75.

古代オリエント漫歩 『明新』18 (1966), pp. 21-29.

パサルガダイのあれこれ 『西南アジア研究』18 (1967), pp. 57-62.

ῥαδενάκη (Herodotos 歴史 VI, 119) のイラン語形について 松平千秋訳 『ヘロドトス』(1967), 筑摩書房 『世界古典文学全集』第10巻, p. 297, 註5

高松塚の幻想 『中日新聞』昭和47年4月24日付夕刊第5面

異邦の要素に富む二月堂の修二会 『中外日報』昭和51年3月4/5日付, 9/10日付第1面

『瓦』の語源 『Abd-Gawrih』大阪外国語大学昭和50年度アジア・アフリカ言語文化研究所ペルシア言語研修修了生グループ(代表西尾哲夫) 2 (1980), pp. 1-3.

- イラン学からみた日本古代史(上)『信濃毎日新聞』昭和55年3月5日付朝刊第9面
イラン学からみた日本古代史(下)『信濃毎日新聞』昭和55年3月7日付朝刊第13面
イラン雑事『文藝春秋』昭和55年5月特別号・第58巻第5号, pp. 77-78.
飛鳥への道—イラン人渡来はあった—(松本清張・古代史新考問答(1))付「松本清張氏と私—
あとがきに代えて—『野性時代』昭和55年5月特大号, pp. 230-60. 松本清張他『謎の源流—
古代史新考問答—』角川書店1981に再録)
『ペルシア文化渡来考』への書評に答えて, 榎一雄博士へ『朝日ジャーナル』222-22(1980年5
月30日号), pp. 80-81.
『舎衛女』考—中村公則氏に答えて—『月刊シルクロード』1980年7月号, pp. 38-39.
再説『ゾロアスター教徒の来日』『朝日ジャーナル』22-37(1980年9月19日号), pp. 84-86.
(ことしわたしはこれをやりたい—)ゾロアスター教書の邦訳を完成へ『中外日報』昭和56年
1月13日付第10面
『眩人』(松本清張)随想ペルシアの墮胎薬『中央公論』1981年3月特大号/第96年第3号/第
1132号, pp. 326-27.
惜春の譜の流れきて『白陵』姫路白陵会, 4(1981), pp. 1-2.
イラン語人名考—『日本書紀』にみえる「達阿(墮羅)」の場合—『東アジアの古代文化』29(1981
年秋号), pp. 152-58.
正倉院の伎楽面『毎日新聞』昭和56年11月18日付夕刊
正倉院屏風絵のナゾ『信濃毎日新聞』昭和56年12月11日付朝刊第11面
頻波の寄すがごとく—イラン系胡人の来日—『明日香風』飛鳥保存財団, 第2号, 昭和56年
冬号, pp. 123-30. [「題名も編集者が無断で変更, 校正刷りも出さず, ミスプリント等が多
い」と注記あり]
文化のルーツを探る(I)—隠し絵の謎—『クロスロード』1982年4月号, pp. 36-41.
『火の路』をめぐる『火の路』(文藝春秋「松本清張全集」第二期)1983, pp. 494-503.
上毛慕情とゾロアスターのことなど『上州路』1984年6月号(No. 122), pp. 74-77.
イラン学と足利先生, そして私と『以文』第27号(1984), pp. 6-8. (『足利惇氏著作集』第3巻
(1988)pp. 115-8に再録)
修二会のイラン的要素『東大寺お水取り—二月堂修二会の記録と研究』(1985), 小学館, pp.
196-202.
いつまでつづく『京大広報』308(1986. 3. 15), pp. 60.
歴史学の謎“ゾロアスター教—その東伝”『高校通信 東書』123(1986), 東京書籍, pp. 2-5.
寮歌よ永遠に—回想の姫路・姫高—『白陵』9(1986), pp. 6-7.
飛鳥寺と古代ペルシア『東アジアの古代文化』50(1987年早春号), pp. 208-10.
回想の福井・福中, そして私と『明新会報』第34号(1987. 3), pp. 12-17.
中期ペルシヤ語の銘文・法隆寺の香木に彫る『あなたに救いを』願ひ『中外日報』昭和62年7

月3日付第7面

この頃の考古学『那由多』波方町樋口, 常念寺発行, 第18号(1987), p. 1.

盂蘭盆とは『中外日報』昭和62年7月13日付第7面

『寺』と『瓦』—中べ語との関係『中外日報』昭和62年8月3日付第7面

中期ペルシャ語と『相輪』『中外日報』昭和62年8月24日付第7面

アショーカ王をめぐる『中外日報』昭和62年9月11日付第7面

ペルシャ文化の東西光被—主として宗教史的に—(上)(下)『中外日報』昭和62年9月30日, 10月2日付第1面

ゾロアスターをめぐる二, 三の問題—上—, —下—『中外日報』昭和62年10月19日, 10月21日付第1面

足利惇氏先生を憶う『足利惇氏著作集』第3巻(1988), pp. 142-44.

地中水道『中外日報』昭和63年3月7日付第10-11面

ゾロアスター教のウラボン祭—盂蘭盆とのかかわり—(上), (下)『中外日報』昭和63年7月1日・7月4日付第1面

雑学のすすめと講座のことなど『京大史記』[京都大学創立九十周年記念協力出版委員会](1988), p. 309.

私の『西域から日本へ』『東アジアの古代文化』57(1988年秋号), pp. 67-79.

続・私の『西域から日本へ』『東アジアの古代文化』58(1989年冬号), pp. 164-67.

中期ペルシア語語彙を発掘して『オリエント』31-2(1989), p. 194. (日本オリエント学会第30回大会発表要旨)

再々論『吐火羅・舎衛』考『東アジアの古代文化』67(1991年春号), pp. 160-66.

『若干の kēśdārān 句』の解釈について—『デーネカルド』第3巻から—『オリエント』33-2(1991), p. 167(日本オリエント学会第32回大会発表要旨)

『モーセのトラー—』か『創世記』か—Pahlavī ghost words をめぐって—『オリエント』34-2(1992), pp. 185-6. (日本オリエント学会第33回大会発表要旨)

先輩土井弘さんのこと『白陵』14(1992), p. 2.

福井・福中との出会い—わが人生の曲折—『明新会報』社団法人明新会, 第40号(1993), pp. 23-27.

『大秦国』の故地を尋ねて—オリエント学もふまえての提唱—『オリエント』35-2(1993), pp. 208-9. (日本オリエント学会第34回大会発表要旨)

旧制姫路高等学校創立七十周年記念会員短集への『百字通信』『白陵第16号特集号』(1993), p. 49.

「ヤサー・アフー・ワリヨ—^{りょうげもん}領解文とアシユウィン双神『オリエント』36-2(1994), pp. 255-6. (日本オリエント学会第35回大会発表要旨)

関本さんと私と『追悼関本至』追悼関本至刊行委員会(発行者 関本みよ)(1994), pp. 18-21.

ゾロアスター教徒の信条告白文とアシュヴィン双神について『中外日報』平成6年6月14日付第1-2面

『対訳正信念仏偈』著者インタビュー『中外日報』平成6年6月18日付第6面

松本清張史学オリエント版のために『東アジアの古代文化』81(1994年秋号), pp. 147-53.

正倉院の羊木文屏風絵—ゾロアスターが見たら—『信濃毎日新聞』平成8年1月19日付朝刊第17面

(6) その他

(談)お水取りとイラン『読売新聞』大阪本社, 昭和51年2月14日付朝刊第10面

(序文)神直道『景教遺文の研究』(1986.12), pp. 7-9.

Préface (to J. de Menasce, Kartak the Heretic and the Ordeal by Fire). *Studia Iranica* 15-2 (1986), p. 1.

このほかに、私の手元には、「岩本裕博士の『書評』に答える」と題した、400字詰め31枚の原稿がある。伊藤先生の、京大の同窓であった岩本裕博士が『迦樓羅』第一号(昭和55年1月, 私家版)に執筆された『ゾロアスター研究』の、14頁にわたる書評への反論である。先生が公表する意志が無く、日本オリエント学会事務局あてにお送りになっておかれたものである。「…別に活字にしようというアテもない假反論してみましたものを別便でお送りしますから岩本君の「書評」をよまれて関心をお持ちの方がおられるなら、そんな方にごらんいただけたらと思います。そしてご用済みの上はお手数ですがご返送いただけますれば幸甚の至りです…」という文面の、昭和55年4月7日付の便箋2枚のお便りがついている。

いかにも先生らしく、きちんと返信用の切手が同封されている。未発表原稿ではあるが、記録のために、ここに記載しておくこととする。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)